

性格検査結果の解釈における指標性 (indexicality) の問題

真田孝昭・山岸俊男
市川孝一・樋野芳雄

どのような人でも、一定の性格検査を受け、これがあなたの性格検査結果です、あなたはこれこれこういう性格ですと言って、デタラメの結果を示されると、それが当たっているように思うものだという事実は、古くから指摘されてきた⁽¹⁾。では、日本においてよく用いられているパーソナリティ・インベントリーについてはどうであろうか。また人は何故当たっているように思うのであろうか。あらかじめことわっておきたいが、パーソナリティ・インベントリーそれ自体を批判することは、われわれの目的ではない。われわれが明らかにしたい⁽²⁾と思っているのは、特に後者の問題、つまり、もう一度繰返すと、何故人は、デタラメの性格検査結果を当たっているように思うのかという問題である。

さて、1953年に既にこのような実験を行なったイタリアのカニザは、筆跡鑑定による性格検査と称して被験者にデタラメの結果を示した⁽³⁾。これらの実験の中の一つは、23人の被験者の26の特性について行なわれたものであるが、カニザは、 $23 \times 26 = 598$ のうち78.8%が受け容れられ、9.8%が疑問を持たれ、11.3%が拒否されたと報告し、この事実を、人間が魔術的な欲求を持っており、それが科学的なかたちで満たされるからであると説明している。カニザの実験の場合、基盤となっている性格検査法があいまいであるため、比較の基準や統制群を設定することができなかった。これに対して、パーソナリティ・インベントリーを用いる場合には、明確な基準を設定できるはずである。そこで、われわれの第一の仮説は——被験者は、呈示された偽の結果に引きずられて、自分の性格はその結果に近いと思う——というものである。

その理由について、カニザは、魔術的欲求をあげたが、われわれは、特性概

念そのものが、ハロルド・ガーフィンケルのというような意味で、指標的 (indexical) であるためだと考えた。つまり、パーソナリティ特性の概念それ自体は、その概念を裏づけ、支持するような諸事実を補われることによってはじめて成り立つのであり、特性が呈示された時、被験者がそれをもっともらしく思うとすれば、それは、被験者がそれを支持するような諸事実を思い浮かべるからである。この意味で、たしかに、性格検査が当たっているように思われる場合と、占いやおみくじが当たっているように思われる場合とは、共通する側面があると考えられる。しかしカニザの言うようにこれを魔術的欲求から来るものだとする必要はないのであって、むしろわれわれが、日常的な現象を解釈する仕方そのものに含まれている特徴によって説明できると考えられる。そこでわれわれの第二の仮説は——被験者が、偽の結果を自分にあてはまるように思うのは、それを裏づけるような事実を思い浮かべるからである——というものである。

《手 続 き》

本実験は、学園祭(一橋祭)を利用して行なわれた。被験者は、一橋祭(1973年11月2日および3日)の参観者(主として学生)である。被験者の年齢は、12才から27才までにわたったが、統計的処理およびインタビュー結果の分析から、14才以下の被験者を除外した。14才以下の被験者の場合、質問紙の各項目および結果の理解が不十分であると考えられるからである。最終的に被験者の数は、男性40名、女性56名、計96名となった。

被験者は、コンピューターを使った性格検査を無料で実施するという宣伝によって勧誘された。

使用したパーソナリティ・インベントリーは、矢田部ギルフォード性格検査の項目を半数に減じたものである。あらかじめ用意されたプログラムは、各特性のパーセントイル尺度を単純化した5段階尺度で表示してプリントし、さらにプロフィールの判定結果をプリントすることになっていた。

結果がプリントされると、インタビュアーは、それをもとに被験者に質問

を行なった。性格検査そのものの威光によって被験者ができるべく影響されないようにするため、われわれは、用いられているインベントリーが、Y・Gであることを知らせなかった。インタビュアーのインストラクションは次のとおりである。「この検査は、新しく開発されたもので、私達は、この検査をお受けになった方が、当たっているとお考えになるか、それとも当たっていないとお考えになるかに関心を持っています。少々お手数ですが質問に答えて下さい。」

インタビュアーは、チェックリストを持ち、被験者に結果を見せながら、一つ一つの性格特性について、被験者に当たっているかいないかを質問し、被験者が当たっていないと答えた場合、正しいと思う点を尺度上に示してもらった。この場合のインストラクションは、例えば次のとおりである。「この特性については、あなたは、4で、普通よりもややある方だと出ていますが、当たりますか当たっていませんか。」

このようにして、12の特性全部について質問を終ると、インタビュアーは、プロフィールの判定についても当たっているか、それとも当たっていないかを質問した。さらに心理テスト一般を信じる方か、それとも信じない方であるかを聞き、最後にこの性格検査を受けた感想を述べてもらった。

本実験で、統制群に示した結果は、被験者によってチェックされた質問紙の結果、つまり、「真の」結果であり、実験群に示した結果は、「偽の」結果であった。偽の結果は、質問紙の各項目に対して乱数をあてはめることによって作成された。

《結果とその考察》

I 統計的分析

われわれは、まず、実験群については、各特性について、「真」の結果と、被験者が自分で考えて正しいと思っているもの（インタビュアーに答えた結果）との差が、呈示された結果に引き寄せられた時にプラスとなるようにして、その平均値を求めた。次に、統制群については、「社会的望ましさ (social desirability)⁽⁵⁾」その他の影響を排除するため、乱数による「偽の」結果が呈示

表-1

1. D 抑うつ性

実 験 群					統 制 群				
		男	女	計			男	女	計
信 じ な い	N	2	7	9	信 じ な い	N	7	5	12
	M	1.00	0.71	0.78		M	0.14	0.60	0.33
	SD	0.00	1.16	1.03		SD	0.35	0.80	0.62
	t	6.00**	0.18	1.08					
信 じ る	N	10	11	21	信 じ る	N	10	13	23
	M	1.70	1.55	1.62		M	0.10	0.62	0.39
	SD	0.90	0.78	0.84		SD	0.54	0.84	0.77
	t	4.58**	2.69**	4.92**					
計	N	12	18	30	計	N	17	18	35
	M	1.58	1.22	1.37		M	0.12	0.61	0.37
	SD	0.86	1.03	0.98		SD	0.47	0.83	0.72
	t	5.14**	1.91*	4.52**					

2. C 回帰性傾向

実 験 群					統 制 群				
		男	女	計			男	女	計
信 じ な い	N	2	7	9	信 じ な い	N	7	6	13
	M	1.00	0.57	0.67		M	0.29	0.33	0.31
	SD	0.00	0.90	0.82		SD	0.45	0.47	0.46
	t	3.87**	0.56	1.13					
信 じ る	N	10	12	22	信 じ る	N	12	15	27
	M	1.40	1.25	1.32		M	0.17	0.07	0.11
	SD	0.66	1.16	0.97		SD	0.37	0.25	0.31
	t	4.97**	3.31**	5.47**					
計	N	12	19	31	計	N	19	21	40
	M	1.33	1.00	1.13		M	0.21	0.14	0.18
	SD	0.62	1.12	0.98		SD	0.41	0.35	0.38
	t	5.32**	3.10**	5.07**					

3. I 劣等感

実 験 群					統 制 群				
		男	女	計			男	女	計
信 じ な い	N	2	6	8	信 じ な い	N	5	6	11
	M	1.00	1.00	1.00		M	0.00	0.50	0.27
	S D	0.00	0.57	0.50		S D	0.63	0.76	0.75
	t	3.16**	1.17	2.40*					
信 じ る	N	10	6	16	信 じ る	N	8	9	17
	M	0.70	0.83	0.75		M	0.00	0.33	0.18
	S D	0.78	0.90	0.83		S D	0.50	0.67	0.62
	t	2.18*	1.07	2.17*					
計	N	12	12	24	計	N	13	15	28
	M	0.75	0.92	0.83		M	0.00	0.40	0.21
	S D	0.72	0.76	0.75		S D	0.56	0.72	0.67
	t	2.78**	1.74	3.06**					

4. N 神経質

実 験 群					統 制 群				
		男	女	計			男	女	計
信 じ な い	N	2	9	11	信 じ な い	N	7	2	9
	M	0.50	1.00	0.91		M	0.43	0.00	0.33
	S D	0.50	0.67	0.67		S D	0.90	0.00	0.82
	t	0.12	4.24**	1.61					
信 じ る	N	7	9	16	信 じ る	N	11	13	24
	M	0.86	1.56	1.25		M	0.64	0.54	0.58
	S D	0.64	0.69	0.75		S D	0.98	0.50	0.76
	t	0.55	3.61**	2.67**					
計	N	9	18	27	計	N	18	15	33
	M	0.78	1.28	1.11		M	0.56	0.47	0.52
	S D	0.63	0.73	0.74		S D	0.96	0.50	0.78
	t	0.69	3.66**	2.98**					

5. O 客観性がないこと

実 験 群				統 制 群					
		男	女	計			男	女	計
信 じ な い	N	3	9	12	信 じ な い	N	6	7	13
	M	1.00	1.44	1.33		M	0.00	0.00	0.00
	SD	1.41	0.50	0.85		SD	0.00	0.54	0.39
	t	1.00	5.16**	4.76**					
信 じ る	N	9	9	18	信 じ る	N	11	15	26
	M	1.22	1.33	1.28		M	-0.09	0.40	0.19
	SD	0.63	0.94	0.80		SD	0.51	0.80	0.74
	t	4.77**	2.36*	4.45**					
計	N	12	18	30	計	N	17	22	39
	M	1.17	1.39	1.30		M	-0.06	0.27	0.13
	SD	0.90	0.76	0.82		SD	0.42	0.75	0.65
	t	4.23**	4.54**	6.32**					

6. Co 協調性がないこと

実 験 群				統 制 群					
		男	女	計			男	女	計
信 じ な い	N	4	7	11	信 じ な い	N	5	8	13
	M	1.25	0.71	0.91		M	0.20	0.63	0.46
	SD	0.43	1.28	1.08		SD	0.40	0.70	0.63
	t	3.28**	0.15	1.15					
信 じ る	N	9	9	18	信 じ る	N	10	18	28
	M	1.11	0.89	1.00		M	0.10	0.44	0.32
	SD	0.57	0.74	0.67		SD	0.70	0.69	0.71
	t	3.23**	1.44	3.21**					
計	N	13	16	29	計	N	15	26	41
	M	1.15	0.81	0.97		M	0.13	0.50	0.37
	SD	0.53	1.01	0.85		SD	0.62	0.69	0.69
	t	4.52**	1.06	3.09**					

7. Ag 愛想の悪いこと

実 験 群					統 制 群				
		男	女	計			男	女	計
信 じ ない	N	5	8	13	信 じ ない	N	6	5	11
	M	1.40	0.63	0.92		M	0.83	0.40	0.64
	S D	0.49	0.70	0.73		S D	1.21	1.36	1.30
	t	0.95	0.31	0.62					
信 じ る	N	8	10	18	信 じ る	N	14	15	29
	M	1.75	1.00	1.33		M	0.50	0.40	0.45
	S D	0.97	1.18	1.16		S D	1.05	0.71	0.89
	t	2.67**	1.37	2.71**					
計	N	13	18	31	計	N	20	20	40
	M	1.62	0.83	1.16		M	0.60	0.40	0.50
	S D	0.84	1.01	1.02		S D	1.11	0.92	1.03
	t	2.89**	1.34	2.67**					

8. G 一般的活動性

実 験 群					統 制 群				
		男	女	計			男	女	計
信 じ ない	N	2	7	9	信 じ ない	N	16	14	10
	M	2.50	0.86	1.22		M	0.17	-0.25	0.00
	S D	1.50	0.64	1.13		S D	0.90	0.43	0.78
	t	1.50	3.06**	2.56*					
信 じ る	N	12	11	23	信 じ る	N	10	10	20
	M	1.08	0.46	0.78		M	0.20	0.50	0.35
	S D	0.95	0.99	1.02		S D	0.75	0.92	0.85
	t	2.32*	-0.10	1.48					
計	N	14	18	32	計	N	16	14	30
	M	1.29	0.61	0.91		M	0.19	0.29	0.23
	S D	1.16	0.89	1.07		S D	0.81	0.88	0.84
	t	2.86**	1.00	2.71**					

9. R のんきさ

実 験 群				統 制 群					
		男	女	計			男	女	計
信 じ な い	N	4	6	10	信 じ な い	N	4	6	10
	M	1.00	1.17	1.10		M	0.00	0.50	0.30
	SD	0.71	0.37	0.54		SD	0.00	0.50	0.46
	t	2.45*	2.39*	3.39**					
信 じ る	N	8	12	20	信 じ る	N	10	19	29
	M	1.00	1.25	1.15		M	0.30	0.47	0.41
	SD	0.50	0.72	0.65		SD	0.64	0.68	0.67
	t	2.46*	2.88**	3.75**					
計	N	12	18	30	計	N	14	25	39
	M	1.00	1.22	1.13		M	0.21	0.48	0.39
	SD	0.58	0.63	0.62		SD	0.56	0.64	0.63
	t	3.37**	3.70**	4.89**					

10. T 思考的外向

実 験 群				統 制 群					
		男	女	計			男	女	計
信 じ な い	N	3	7	10	信 じ な い	N	6	7	13
	M	0.33	0.86	0.70		M	0.50	1.00	0.77
	SD	0.94	0.83	0.90		SD	0.76	0.93	0.89
	t	-0.22	-0.28	-0.18					
信 じ る	N	12	10	22	信 じ る	N	11	15	26
	M	0.92	1.30	1.09		M	-0.18	0.27	0.08
	SD	1.19	0.90	1.08		SD	0.94	0.77	0.87
	t	2.37*	2.84**	3.45**					
計	N	15	17	32	計	N	17	22	39
	M	0.80	1.12	0.97		M	0.06	0.50	0.31
	SD	1.17	0.90	1.05		SD	0.94	0.89	0.94
	t	1.90	2.08	2.74**					

11. A 支配性

実 験 群				統 制 群					
		男	女	計			男	女	計
信じない	N	3	7	10	信じない	N	3	4	7
	M	1.33	0.71	0.90		M	0.67	0.50	0.57
	SD	0.47	0.45	0.54		SD	0.94	0.87	0.90
	t	0.89	0.40	0.80					
信じる	N	9	8	17	信じる	N	11	14	25
	M	0.67	0.75	0.71		M	0.09	0.00	0.04
	SD	0.47	0.66	0.57		SD	0.29	0.38	0.34
	t	3.03**	2.77**	4.19**					
計	N	12	15	27	計	N	14	18	32
	M	0.83	0.73	0.78		M	0.21	0.11	0.16
	SD	0.55	0.57	0.57		SD	0.56	0.57	0.57
	t	2.72**	3.02**	4.13**					

12. S 社会的外向

実 験 群				統 制 群					
		男	女	計			男	女	計
信じない	N	4	7	11	信じない	N	4	5	9
	M	1.50	1.00	1.18		M	0.25	1.00	0.67
	SD	0.50	0.76	0.72		SD	0.43	0.89	0.82
	t	3.27**	0.00	1.40					
信じる	N	11	13	24	信じる	N	11	15	26
	M	0.73	0.62	0.67		M	0.18	0.13	0.15
	SD	0.75	0.74	0.75		SD	0.39	0.34	0.36
	t	2.05*	2.08*	2.99**					
計	N	15	20	35	計	N	15	20	35
	M	0.93	0.75	0.83		M	0.20	0.35	0.29
	SD	0.77	0.77	0.77		SD	0.40	0.65	0.56
	t	3.16**	1.73	3.31**					

されているものと仮定して、インタビューの結果がその方向にある場合がプラスになるようにして「真の」結果との差の平均値を求めた。それぞれの特性について、この二つの平均値の差のt検定を行なった。結果は、表-1のとおりである。

(N… 標本数, M… 平均値, SD… 標準偏差, t… 平均値の差のt値, * … 5%水準で有意, **… 1%水準で有意, 実験群には乱数が呈示されたので, 呈示されたものが偶然「真の」結果に一致した場合は統計的な分析から除いた)

まず、統制群については、「真」の結果が呈示されているので当然ながら平均値は低い。これに対して、実験群については、ほとんどの特性について平均値は高くなった。実験群全体と統制群全体の平均値の差を検定した場合、各特性とも実験群の平均値が、1%水準で有意に大であった。これは、実験群の被験者たちが、呈示された「偽の」結果に引き寄せられたことを示すものである。

男女の差について言えば、男性被験者のNについては、平均値の差は有意でなく、女性被験者のCo, Ag, およびGについては、平均値の差は有意ではなかった。バックマンらは、かれらの実験に基づいて、特性が、顕著 (salient) である場合と「重要な他者たち (significant others)」の間で評価が一致している場合には、偽の結果を教えられても被験者は自己認知を変えようとしないと述べている。⁽⁶⁾ われわれの実験の範囲をこえた問題であるが、このような性差の原因を明らかにすることは、今後の興味深い研究課題であろう。

さらに、心理テスト一般を信用する被験者と信用しない被験者との差について言えば、当然予想されるように、信用しない被験者は、概して、偽の結果に引きずられなかったと言える。

次に、プロフィールについて被験者に当たっているか当たっていないかを評価してもらったが、その結果は、実験群全体の77.8%が、プロフィールによる判定結果が当たっていると評価した。⁽⁷⁾

II インタビュー結果の考察

<状況の定義>

シンボリック・インタラクショニスト、あるいは、社会行動主義者たちが、しばしば指摘しているように、われわれの⁽⁸⁾実験においても、被験者たちの状況の定義 (definition of the situation) を完全に統制することはできなかった。われわれは、インタビューの最後に、被験者に感想を求めたが、それらはお互いに大きく異なっていた。

対照的な例を二つあげておこう。

例 1. 「こういう調査は好きです。これからも、もっと積極的に参加したいです。」(男17才) この被験者は、状況に対して極めてポジティブな態度をとっている。これに対して

例 2. 「んー、なんか、あのねー、自分の性格を判断されるんじゃないくて、反対に、なんかこう、なんか、なんて言ったらいいのかしら… 利… 悪く言えばね、利用されてる感じがした。すいませんけどね。」(女20才) というような極めてネガティブな感想を述べる被験者もいるといった具合である。

しかしながら、このような実験状況についての定義の多様性にもかかわらず、被験者たちは、一般に、われわれの仮説どおり、呈示された結果を受け容れていた。

われわれが最も関心を持ったのは、被験者たちがどのようにして、呈示された結果に意味づけを行なうかということであった。そして、それを明らかにするのが本実験全体の主要目的でもある。

まず、プロトコルから一つの例をあげよう。この被験者 (男15才) は、T、すなわち「思考的外向性」について話している。(Iは、インタビュアー、Sは被験者である。)

I. 「これは、もの事を深く考えないっていう傾向ですね。これは、4で、普通よりもややある方だっというふうに出ていますがこれはどうですか。」

S. 「そうだなー、問題やなんか解く場合は、すごく、あの、深く考えたりす

るのは好きなんですけど。」

I. 「問題ってのは、それはどういう問題。」

S. 「えーと極端ていうか数学とか化学に限って言えばそうなんですけど。」

I. 「あー、理科系の課目ね。」

S. 「でもあの一、えーと社会問題とかそういうの深刻になって考えるってことはないし、そういわれてみると映画とかテレビでも、なんとなく社会学とか… えーと、その人間関係が複雑だとかそういうのは嫌いで、えーと、なんか、戦争映画とかそういうのが好きだから、そういう面ではしゃべりそうかも知れませんが。」

I. 「はーはー、なるほどね。」

S. 「やっぱり問題が学問に関しては深く考えなくちゃいけないというふうに思います。」

I. 「そうすると、生活全般で考えるとどうですか。これ、やや、あるというふうな診断でどうですか。」

S. 「まー、大体当たっています。」

「真の」結果が示すところによると、かれの思考的外向性は高くないのである。

<意味づけの諸類型>

われわれの主たる目的は、前にも述べたように、このような意味づけの過程、つまり、偽の結果を呈示された被験者が思いあたる事実を探っていく過程を明らかにすることにある。例えば、上にあげた例では、被験者は、自分が、テレビ番組や映画の中で、複雑な人間関係が主題となっているようなものをあまり好まず、戦争物が好きだという事実を探り出した。

とはいえ、すべての被験者が、このようによく話をしてくれたわけではなかった。むしろ、半数以上の被験者たちは、特性の説明をきくと、すぐさま納得し、「はい」だとか、「いや全くそのとおりです」、「よく当たっています」などと答え、時間的な制約もあって、それ以上詳しく説明してもらうことができなかった。したがって、意味づけ過程の全体的、一般的な傾向、類型を明らかに

するためには、よく話してくれた被験者たちのプロトコルに依拠せざるをえない。ここでは、論述を簡潔にするために、12の特性全体について、いくつかの意味づけの類型について考察するにとどめたい。

(1) 時と場合

YGを構成している大部分の特性項目の意味内容は、誰しも時と場合により陥るような状態をあらわしている。例えば、I<劣等感>は、「劣等感に悩まされる、自信がないなどの自己の過小評価、劣等感の強い性格である」と定義され、O<客観性がないこと>は、「ありそうもないことを空想する、ねつかれないなどの空想性と過敏性である」と定義されている⁽⁹⁾。だが何かのきっかけで、劣等感に悩まされたり、自信を失なったりしたことのない人がいるだろうか。また、ありそうもないことを空想したり、ねつかれなかったりした経験は、ほとんどの人が持っているのではなかろうか。

このような推論に基づいて予想されるとおり、「時と場合によりますから、そういうこともあります」とか、「そういう時もあります」といった意味づけの方法が、最も多くあらわれた。

例えば、一人の被験者(女18才)は、D<抑うつ性>が、「4で、普通よりもややある方」という結果について次のように述べている。

S.「その時によって違うんです。わりと気分屋ですから。」

I.「で、一般的に言うと。」

S.「そう、わりと陰気になる時もあります。もう、なんていうか、全然しゃべりたくないような時もあります。」

(2) 過去と現在

(1)の場合、時間的状況的な気分の変化を前提として、意味づけがなされているのに対して、過去の自分と現在の自分が全く違うのだという前提の上にならって、過去にそうであったものが、今、結果としてあらわれている、あるいは、過去にはそうではなかったが、最近そうってきていて、それが結果としてあらわれているという意味づけの仕方もある。T<思考的外向性>について双方の例をあげておこう。

最初は、女の被験者（18才）のプロトコルである。

I. 「これは、あまりない方だ、つまり物事を深く考える方だと出ていますが、これはどうですか。」

S. 「えー、そういう性格でした。」

I. 「でした。」

S. 「えー、最近は考えないように努めています。」

この被験者の場合、実際には思考的外向性は、高い方なのである。次の男の被験者（20才）の場合には、この被験者の場合とは逆である。

I. 「これは、4で、物事をあまり深く考えない方だと出ていますが。」

S. 「最近そうになってきたのは確かだな。昔はそうでもなかったけど。最近そういう傾向になってきたですね。前はそうじゃなかったけど、最近自分考えてみて、こんな感じになってますけど。」

この被験者の「真の」結果は、Tが低いと出ているのである。

(3) 性格の両面

いく人かの被験者たちは、自分の中に正反対の二つの性格が並存しており、そのうちの一方の性格が、結果として出ているのだという意味づけを行なった。例えば、一人の被験者（女18才）は、D<抑うつ性>について次のように述べている。

S. 「ちょっと、あのー、大学入る前と入ってからと性格がかなり変わるから、こういうの両面でてると思うんですね。」

I. 「あなた何年生ですか。」

S. 「1年です。」

I. 「じゃあ変わったと言っても半年ぐらいね。」

S. 「でも…」

I. 「じゃあ今のことを考えるとどうですか。」

S. 「両面あるんですよ、結局。でもあると思います。」

もう一つ、女の被験者（18才）のプロトコルをあげておこう。ここでは、N<神経質>が問題になっている。

- S. 「えーと、それあの一、全体的には、そういうふうには言えなくて、ある部分にはすごく神経質で… そいですごく… ズボラなところもあるし、ちょっとよくわかんない。」
- I. 「それであの一、例えばどういうことに神経質になったりするわけ。」
- S. 「えーと、わりとこういうふうにあの一、つまらないことで、あの一、そうね、えーと、友達関係とかそういうことで、わりと神経質になっちゃうこともあるし。」
- I. 「ズボラ、ズボラだってことは。」
- S. 「あの一、わりとだらしない性格があつて。」
- I. 「んー。」
- S. 「あの一、だからわりと部屋なんかも。」
- I. 「ちらかしちゃうとか。」
- S. 「えー、そうしてても平気です。」
- I. 「そういうこと全体的に考えるとね。どうかしら。」
- S. 「えー、だから、ほんとその場合によって違うから一、ちょっとよくわかんない。」
- I. 「これは、どうですか。このあまりない方だという言い方は。」
- S. 「そうです。だから、そういう、んー、わかんないけれども一、んー、やっぱり当たってんのかな。」

この被験者の結果は、ややある方であるが、最終的には、偽の結果を支持する事実を捜し出して、偽の結果を正しいとした。

(4) 外見と本質

表面は、そうであるが、本質はそうではない、あるいは、表面にはあまり出ないが、本質はそうであるといった意味づけもあらわれた。例えば、次の例は、「両面」という意味で(3)に該当するかもしれないが、ここで取りあげたい。これは、女の被験者(20才)のプロトコルであり、D<抑うつ性>が話題になっている。

- I. 「これは、4で、普通よりもややある方だ、だから陰気で悲観的な傾向が

どちらかといえばある方だと出てますが、これはどうですか。」

- S. 「ん、どういうのかな、両面あるということなんです。わりと世間では明朗な方で通ってるようですけど、自分ではかなり陰気な面があると思います。」

実際にこの被験者がつけた結果は、抑うつ性が低いことを示している。

同じ抑うつ性について、次の被験者（女19才）の場合も同様である。

- I. 「この傾向は、5で、普通よりも非常にある方だと出ていますが。」

- S. 「これ、あたしはね、すごく悲観的でね、陰気だと思うんですけども…
あの、みんなに、みんなの前に出る時は、みんながすごく明るっていいます。」

また、別の被験者（女19才）のS<社会的外向>についてのプロトコルは、次のとおりである。

- I. 「…つまり、これは、ま、人づきあいのよい傾向だと考えてもらえばいいですが、これは5で、普通よりも非常にある方だと出ていますが、これは当てていますか。」

- S. 「本当いうとそんなにないんじゃないかと思います。でも表面的にはあると思います。」

この被験者の場合には、表面的な人づきあいのよさということを根拠にして、最終的には偽の結果が受け容れられた。

(5) 努力と欲求

自分が、そうでありたいと望んで努力しているから、また逆に、自分が望んでいないから、そのような結果が出ているのだというかたちでの意味づけも散見された。努力についての一例をあげよう。被験者は、女（18才）で、T<思考的外向性>が話題になっている。

- I. 「これは、かなりある方で、つまり物事をあまり深く考えないというふうに出てるわけですが。」

- S. 「でもね、あの、ほんとに、ほんととはとっても考え過ぎる傾向があるの…
すべてについて。」

I. 「あっそう。」

S. 「ん、ちょっとね。ささいなことでもすごく考えるからね。だからねー、なんていうの。考えないようにいつもしてんのね。だからなるべく忘れようっていうか、そういう傾向があるわけなの。」

I. 「じゃあ本来は自分の中にそういう傾向がある。」

S. 「んー。」

I. 「あるから。」

S. 「ん、とっても… そうなっちゃうとね、なんか、だからそういう考え過ぎちゃうと、そこから立ち上がれないっていうかそういうあれでね。なるべく考えないようにしてるんです。」

I. 「そういうことに陥っちゃいけないと。」

S. 「そうそう。」

I. 「だからこういう結果が出てきてもいいわけですか。」

S. 「はい。」

次にあげる被験者(女20才)のプロトコルでは、A<支配性>の低さが欲求によって意味づけられている。実際の結果は4である。

I. 「… 社会的指導性ですね。これは、あまりない方だと出ていますが。」

S. 「えー、自分としては、指導的、指導的になりたいと思わないからー、ん、気持としては。」

(6) 他項目との関連

被験者たちの中には、他項目との関連で一つの項目の意味づけをする人もいた。次の被験者(男16才)のプロトコルはその一例である。ここでは、S<社会的外向>が問題となっている。インタビュアーは、Sを社交性と説明している。

S. 「ある時もあればない時もある。だから二番目に、感情の変化ってのありましたね。」

I. 「えーえー。」

S. 「ここでその感情の変化がうんとあるってことは、以後の性格に変動があるってことですよ。ま、社交性っていう点でも非常に社交的な場合もあれ

ば、閉鎖的っていうか、非社交的な場合もあるということです。」

(7) 基準の移動

比較の基準を移動させて、意味づけを行なう被験者もいた。例えば、次の被験者（男19才）の場合、G<一般的活動性>は、実は5で極めて高い方だと出ている。

I. 「活動性は、3で普通というふうにこう出てますけど。」

S. 「うーん、まあ結構、身体を動かすのは好きな方だから。まあ、でも普通の人なら身体を動かすのは好きでしょ。大体。」

I. 「はあはあ。」

S. 「それで例えばプロ野球の選手なんかは、もうすごい好きとか、一般的な人は、例えばテニスやったり、まあ、サッカークラブ入ったり、あるいは、まあ、野球同好会ぐらいの程度。まあ普通ぐらいじゃないかと思うんですけどね。」

(8) 定義の変更

定義を変更することによって意味づけをする被験者もいた。次のプロトコルは、T<思考的外向>について語っている被験者（女18才）のものである。

I. 「これは、5で非常にある方、物事を… ほとんど深くものを考えない方と出ていますが。」

S. 「はっはっは、これはおかしい。なんか物によるもん。」

I. 「例えば。」

S. 「だっておかしいなーこれ。」

I. 「物によるって、例えばどういう物によるわけ。」

S. 「あっ、だから要するにね。」

I. 「ん。」

S. 「なんか自分で、自分にかかわりのあること… あっ、利己的なんだきつと。」

I. 「ん。」

S. 「そうなんだ。きっと。利己的だからね、自分に関係ないこと考えないの。」

以上がプロトコルの概括的な分析である。われわれの分類は、いささか恣意

的であり、われわれの分類範疇は、幾分重なり合う所があって不十分であるかもしれない。しかし、被験者が、結果を受け容れるのは、魔術的欲求といったようなものが満たされるためではなく、一つの合理的な思考過程の結果であることは十分に例証されたはずである。事実がある故に結果があるという論理は、結果がある以上は事実があるという論理に転化してしまうのである。何故なら、概念（ここでは、特性名）とそれを証拠立てる事実とは、お互いを洗練し合う関係にあるからである。

<偽の結果によって動かされない場合>

既に、統計的分析結果の部分で簡単にふれておいたが、バックマンら¹⁰⁾は、被験者に EPPI の偽の結果を見せ、その結果自己認知がどのように変わるかを調べた。この結果、まず第一に、顕著な特性、いいかえれば、よく意識され生活の中で度々考えさせるような性格特性、についての自己認知は、偽の結果によって影響を受けにくく、第二に、「重要な他者たち (significant others)」の間で評価が一致している性格特性についても、偽の結果による自己認知の変化が生じにくいことが明らかになった。

われわれのインタビュー結果は、バックマンらの後の方の知見を支持しているようであり、幾人かの被験者たちが、例えば、「通信簿にそう書かれた」、「父がいつもそう言う」、「両親がそう言っている」、「先輩がいつもそう言う」などの理由で、偽の結果に反論した。しかしながら、これらの例がさほど多くないことは、統計的な分析結果が示しているとおりでである。

《結びにかえて》

われわれの実験では、被験者たちの大部分が、偽の性格検査結果を当てる¹¹⁾として受け容れた。その理由は、被験者たちが魔術的欲求を持っているからではなく、パーソナリティ・インベントリを構成している性格特性名が、「指標的 (indexical)」であり、解釈者が内容を補填 (filling in) することによって成立するという性格を持っているからである。すなわち、与えられた特性名とパーセンタイル尺度上の一点が、それに一致し、それを証拠立てる事実を照射¹¹⁾するということなのである。

註

- (1) ローラッヘル, 宮本忠雄訳『性格学入門』, みすず書房, 1959年, 9-14頁。
- (2) 心理テストの詳細な批判的検討については, 岩脇三良『心理検査における反応の心理』, 日本文化科学社, 1973年および『臨床心理学研究』, 第11巻, 第2号などを参照。
- (3) Kanizsa, Gaetano “Sulla validazione delle diagnosi de Personalita,” *Archivio di Psicologia, Neurogia e Psichiatria*, 14, pp. 651-674.
- (4) Garfinkel, Harold, *Studies in Ethnomethodology*, Englewood Cliffs, N.J., 1967, pp. 10-11. および Turner, Roy, *Ethnomethodology*, London, 1974 参照。ガーフィンケルの考え方を徹底して押し進めて行くと, インベントリーの各項目それぞれ自体の段階で論理的に重大な問題点が存在することが明らかになり, それは必然的に心理テスト批判につながる。この点については, 例えば, Heritage, Jhon, “Assessing People”, in Nigel Armisted (ed.) *Reconstructing Social Psychology*, London, 1974, pp. 266-270. 参照。しかし本稿でのわれわれの課題はそこにはない。
- (5) Edwards, A. L., *The Social Desirability Variable in Personality Assessment and Research*, New York, 1957 などを参照。
- (6) Backman, Carl W., Secord, P.E. and Peirce, J. R. “Resistance to Change in the Self-concept as a Function of Consensus Among Significant Others”, in Carl W. Backman and Paul F. Secord, *Problems in Social Psychology*, New York, 1966, pp. 462-467.
- (7) プロフィールの性質上, われわれの仮説を統計的に検定することはできなかった。
- (8) Friedman, Neil, *The Social Nature of Psychological Research*, New York, 1967.
- (9) 辻岡美延『新性格検査法』, 竹井機器工業株式会社, 1967年, 8頁。
- (10) Backman et als., *op. cit.*
- (11) たしかに, われわれの被験者たちは, 心理学の専門家ではない。したがって, 結果を素人に解釈させても意味はないという批判は可能である。しかし, 専門家は, 特姓名の定義を変更したり, 標準化された尺度を無視することはないにしても, それ以外の点でより秀れた解釈をしているのであろうか。われわれの被験者が行なった意味づけの仕方は, 専門家も利用しているし, 利用せざるをえないものである。専門家は, インベントリーの結果から「事実」を探るのだからである。

〈付記〉 データ処理にあたり一橋大学 FACOM 230-25 システムを利用させていただいた。電子計算機室の皆様, 特にプログラマーの鷹野三千代さんに大変お世話になった。記して感謝する次第である。さらに実験を手伝って下さった福永真理子, 岩田明子, 馬淵修, 北出晃, 青崎敏彦, 中谷敏夫, 亀井滋他南ゼミナールの方々に感謝したい。

性格検査結果の解釈における指標性

また貴重な文献を手に入れて下さった シカゴ大学大学院の草津攻氏にもこの場を借りて感謝する次第である。最後に、たまたま実験群の被験者になって下さった方々には、正しい結果を既に郵送したのであるが、被験者になって下さった方々全員に深く感謝する次第である。

(筆者の住所)

真 田 孝 昭 福生市福生1,002 芙蓉荘3号

山 岸 俊 男 国立市中2~18~9

市 川 孝 一 国立市東2~4 一橋大院生寮

樋 野 芳 雄 葛飾区東金町4~38~13